

第 39 回土木計画学研究発表会（春大会）：2009. 6. 13～14（徳島大学）

企画論文部門 セッション討議内容の記録

セッション名：避難行動	
日付： 6月 14日（日）曜日，セッション時間：14：20～15：50	
オーガナイザー・司会者名（所属）：畑山満則（京都大学）	
討 議 内 容	セッション全体：全体討議は行わず個別の発表で議論がなされた。
	(269) 村澤直樹（群馬大学大学院）： <ul style="list-style-type: none"> ・5倍の認識はガイドラインなのか？漁民の判断なのか？ →漁民の意見も入ったもの。 ・地震から警報までの間の作業について →沖だしするか高台に行くかの判断がある。漁民は基本的に漁船を見にってしまうので、漁港に しるしを出してしまおうと考えた。 ・見に行くのは許してしまうのか？ →実態として見にってしまうので、見に行った後のルールを決めてみた。赤印の時に海に出ても、 法的には何ら問題はない。 ・電氣的な信号は地震時には作動の保証がないのではないのか？ →本当は信号がなくても、できるようにしていきたい。 ・信号に電池などの電源をつけておけばよいのでは？ →ハードの対策に依存するのは危険と思われる。 ・青だったが場合に海に出て被害にあったときにどうなるのか？ →WSの中で周知しており（信号もつかないで場合もあることも含めて）、責任は漁民に行くよう になっている。 ・設置も漁民や漁協がやるのか？ →行政は逃げ腰。海上からの避難に比べて陸上の話は特に難しい。
	(270) 及川康（群馬大学大学院）： <ul style="list-style-type: none"> ・言語部分は取り払って考察しているが、シンプルな言語なら有効性はあるのではないのか？ →言語がなくても機能を果たすのが重要と考えた。 ・矢印（→）が大きなポイントと思われるが矢印のファクタはあるか？ →矢印のファクタはない ・波は単一より複数のもののほうが良いというのはなぜか？ →直感的に激しそう（危険そうに）に見えるからと思われる。 ・外国人に対する調査は行っているか？ →まだやっていない。外国人が自国の標識をみたら理解できるかもしれない。
	(271) 谷口綾子（筑波大学）： <ul style="list-style-type: none"> ・プログラム実施の際に資料を配布しているが、講習会などをしてみたほうが効果があるのでは？ →講習会に参加してもらおうのが難しいと思われる。 ・対象地域を絞り込んでやると効果が違うかも（土砂災害のカルテ） →接種効果を期待してその後の混乱を避ける意味で今回は絞り込みをかけていない。

- ・高齢化率が高いと個人での避難は難しいので、集団での避難を検討してみてはどうか
 - ・自治体が地域住民に直接電話してしまうという例もあるが..
- ここではやっていない。電話がかかってこないと問題になるという危惧もあるのではないか。

(272) 上田健人（舞鶴市役所）：

- ・スライダーを動かすのは誰を想定している？
- 住民が動かすことを想定している。実際に動かしてもらうと意識を再確認してもらえる。
- ・避難準備情報が出た時に要援護者とコミュニティはどういう関係？
- コミュニティも要援護者と同時に動く。
- ・要援護者だけ車で避難させるというシナリオもあり得ると思うが？
- この研究では、要援護者とは子供とかお年寄りであって、障がい者は想定していない。
- ・自分でやってもらう場合、図の意図するところを解釈してあげる必要があると思う。

※発表件数に応じて適宜追加してください。